

研修参加報告書

令和8年3月25日

会派名 江南政策研究会
会派代表者 片山 裕之

(参加者：長尾光春)

研修参加の結果について、次のとおり報告します。

年月日	令和7年7月28日(月)～29日(火)
研修時間	7月28日 13:00～17:05 29日 9:00～12:20
研修場所	全国市町村国際文化研修所(JIAM)
研修内容	令和7年度 第2回市町村長等・議会議員特別セミナー 講師： 神戸市長 久元 喜造 氏 文芸評論家 三宅 香帆 氏 小説家 宮島 未奈 氏 國學院大學 神道文化学部 教授 松本 久史 氏 株式会社 BOOK 代表取締役会長 樋口 聖典 氏

研修参加報告書

年月日	令和7年7月28日（月）～29日（火）										
研修時間	7月28日 13:00～17:05 29日 9:00～12:20										
研修場所	全国市町村国際文化研修所（JIAM）										
研修内容	<p>令和7年度 第2回市町村長等・議会議員特別セミナー</p> <p>講師：</p> <table> <tr> <td>神戸市長</td> <td>久元 喜造 氏</td> </tr> <tr> <td>文芸評論家</td> <td>三宅 香帆 氏</td> </tr> <tr> <td>小説家</td> <td>宮島 未奈 氏</td> </tr> <tr> <td>國學院大學 神道文化学部 教授</td> <td>松本 久史 氏</td> </tr> <tr> <td>株式会社 BOOK 代表取締役会長</td> <td>樋口 聖典 氏</td> </tr> </table>	神戸市長	久元 喜造 氏	文芸評論家	三宅 香帆 氏	小説家	宮島 未奈 氏	國學院大學 神道文化学部 教授	松本 久史 氏	株式会社 BOOK 代表取締役会長	樋口 聖典 氏
神戸市長	久元 喜造 氏										
文芸評論家	三宅 香帆 氏										
小説家	宮島 未奈 氏										
國學院大學 神道文化学部 教授	松本 久史 氏										
株式会社 BOOK 代表取締役会長	樋口 聖典 氏										
■目的	<p>日々めまぐるしく変わりゆく国内外の情勢の中で、様々な行政課題について学び、施策を提案・実施していくことが求められている。</p> <p>今回のセミナーでは、各分野でご活躍の先生方からご講演をいただき、改めて現代社会を捉え直すとともに、今後のわがまちの未来や地方行政に求められる役割について多角的に考えていく。</p>										
■内容	<p>1日目 (講義内容)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「真の意味での持続可能な都市を目指して」 神戸市長 久元 喜造 氏 ・「地域の魅力を引き出す文学の力」 文芸評論家 三宅 香帆 氏 小説家 宮島 未奈 氏 <p>■久元氏の講義では、持続可能な自治体経営について学びました。自治体における課題は自治体ごとに異なり、すべての課題に対して一律に行える対応策はないものの、それぞれの課題に対して正面から向き合い、解決策を導き出し実施していくことがとても重要な考え方であるとのことでした。始めに、人口の動向をまとめている「国立社会保障・人口問題研究所」の資料について言及がありましたが、実はこの資料は全く役に立たないものであるとの苦言が呈されました。2023年度に作成さ</p>										

れたこの資料に対し、2024年時点ですでに実際の人口動向から大きく乖離しており、2年が経過した2025年時点では新生児の数が63万人まで減り、さらに乖離が広がっているにも関わらず、2038年にはこのような人口推計になるとの報告が国でそのまま利用されているということでありました。国から見ると人口を増やすのは地方自治体の仕事であるとのことであり、国は人口を増やす施策を全くとっていないことが今の少子化の実態であることがわかりました。韓国では、合計特殊出生率が1.01にまで下がっており、国が持続的に栄えていくための指標(2.0)から大きく乖離しており、国、企業、自治体すべてを上げて人口増加に向けた政策を行っているにも関わらず、それでも人口減少が止まっていないという現状があるが、日本では、その現状について見向きもしていないことが現在の問題点であるとのことでした。

日本における3大都市圏という言葉は現在では死語になってきており、関東圏では東京都、神奈川県、埼玉県、千葉県が転入による人口の社会増であるものの、その他は、マイナスであり、関西圏では大阪府のみがプラスでその他はマイナス、中部圏に至ってはすべての県でマイナスになっているということでした。現在は東京一極集中の状況であるにも関わらず、国の政策がそれに追いついておらず、根本的なシステムが現状に対応できていない状況であることがわかりました。

神戸市においても同様で人口減少が進んでいる状況であり、他の自治体と変わりがなく、この課題が決して他人事ではないとのことでした。

現在の日本の地方自治体の中で人口が増加している自治体は全体の20%程度であり、その自治体はよく「人口増加に向けたモデルケースとなるような政策を行っている」とか「特別な取組を行っている」とか「参考にすべき政策がある」とか言われているが、決してそんなことはなく、人口増加している自治体であっても、新生児の出生数が増えていることが重要であり、これが減っていることになれば、最終的には、現在人口増加している自治体もすべて人口減少に転じることにつながっていくことが懸念されているとのことでした。

別の資料では、「地方消滅可能性自治体」の紹介がありました。若い女性の比率が自治体の半分を切った都市は、将来消滅するというものでした。2050年までに消滅する可能性があるという自治体からは大きな反発が出た資料ではあるものの、「若い女性が少ない、イコール、新生児の出生数が少ない」ことからさらなる人口減少、高齢化が進み、自治体としての運営が困難になる、ということでした。

東京都では、人口増加に伴い、タワーマンションがたくさん建設され、さらにこのタワーマンションが外国の投資家にいくつも買収され、その結果、値段がどんどん高額化しており、今や新築マンションが1億円を超えるものがほとんどであるとのことでした。それにより、一般の市民が購入できるものではない投資物件化が進み、さらに空き家が増え、将来の維持管理に大きな課題がのしかかる状況になりつつあることがわかりました。

日本における人口減少が進む中、日本の世帯数、住宅数の供給量については、1968年の時点で、住宅が余る状況になっているにも関わらず、それから約60年間、購入者の需要に応じて、家を建設しつづけており、それに伴い空き家が増えてくるこ

とで、現在における空き家問題が全国的な課題となっていることがわかりました。空き家対策は 10 年前から取り組みが始まっているが、人口の流出とともに空き家が増え、放置された空き家が老朽化し、それが残ることで、都市のスポンジ化が進むがこれについて自治体、国も積極的に取り組みが進んでおらず、現在では、タワーマンションに人気が集積し、そのマーケットの需要に合わせて、更なるタワーマンションの建設が進む状況になっているとのことでした。一方で、人気がない戸建ての空き家はどうなるのか、その対応が進んでいないということであり、さらに築 40 年が経過した分譲型のタワーマンションはどうなるのかという問題が顕在化してきていることも紹介されました。

空き家が多くなった老朽化したマンションの維持管理費が足りず、管理や修繕が円滑に行えない状況も発生しており、将来的には危険な建物になるリスクが高いと予想されているものが増えてきていることがわかりました。

これらの状況を見据え、都市の持続可能性を重要視する神戸市では新たな都市づくりのビジョンを作成する際に、神戸市のエリアの特徴を見つめ直し、持続可能なまちとはどのようなものかと考え、「都心」、「開発・規制をしたニュータウン」、「豊かな山間部、森林、里山」の 3 つのエリアに分け、それぞれの魅力を生かした「まちの再生」をしていく方針としたとの説明がありました。

「都心」においては、タワーマンションの建設に対する規制をしつつ、「ニュータウン」においては容積率を 400% にアップすることで開発を進め、人口流出を抑制するとともに、デベロッパーにおける都心でのタワーマンション建設のインセンティブをなくし、「都心」の集中した地域にタワーマンションが立つことによる弊害をなくすことに成功したとのことでした。

神戸市の事例も一つの参考事例として捉えていくことは可能であるが、自分たちが暮らす自治体の特徴を見つめ直し、それぞれの自治体の魅力、強みを捉え、人口減少が進む中、どのようなまちづくりをすることで、持続可能な自治体になれるのかを市民全体で考え、検討し、実施していくことが重要であることを理解しました。

■三宅氏、宮島氏の講義では、宮島氏が出版した「成瀬あかりシリーズ」の小説の舞台となった滋賀県大津市にどのような効果をもたらしたか、について学びました。同小説は 2024 年本屋大賞を受賞したことで、より注目を浴びたものであり、一部架空の施設はあるものの、実際の大津市に存在する建物や店舗などが舞台となっていることから、小説を読んだ読者が「聖地巡礼」として実際の町や店舗を訪れ、大きな経済効果をもたらしたことがわかりました。

しかしながら、宮島氏は小説を執筆する上で、大津市を「盛り上げよう」とか「町おこしをしよう」といった思いはなく、本人が在住する地域をたまたま小説の舞台にただけのものが、結果的に現在のような小説の舞台となった地域のつながりによる盛り上がりになっただけであり、筆者が町おこしに対して全く前向きではなく、大津市が探訪マップを作成するにあたって、本人が資料を監修することはなく、ご自由にどうぞとのスタンスで、あったとのことでした。

今回の講義では、評論家の三宅氏が、宮島氏の小説のファンであったことから、小説の内容の素晴らしさや執筆にあたっての取り組みの内容などの意見交換が行

われたが、ファンミーティングの様相を呈しており、大半が本件講義のタイトルから逸脱する内容でした。

結果的には小説が売れ、その舞台となった大津市に経済効果をもたらしたが、その戦略はなく、今回の事例をそのまま他の事例に結びつけることはとても困難なものであることがわかりました。

2日目

(講義内容)

- ・「明日を生きるために 一人文知を地域に生かすー 近世国学から学ぶ」
國學院大學 神道文化学部 教授 松本 久史 氏
- ・「みんながやりたい場所をつくる廃校利活用施設
『いいかね Palette』の運営について」
株式会社 BOOK 代表取締役会長 樋口 聖典 氏

■松本氏の講義では、国学を今一度学び、地域の文化・伝統の再発見による地域振興の可能性について学びました。

はじめに、国学の定義について学びました。国学とは、近世中期に新たに発生した、日本古代の文献(古典)を対象とした実証的な研究に基づき、日本固有の歴史やカミ信仰・倫理道德の追求のみならず宇宙観・世界観におよぶ独自性や普遍性を主張していった学問であるとの紹介がありました。

古典が刊行されたのは江戸時代初期の寛永21年(1644年)で、「寛永版本」と呼ばれるものが一番古いものであるとのことでした。

しかし、出版されたのは原文テキストであったことから、内容を理解することは困難であり、これらの古典を国学者が、「読める」から「理解できる」ものにしたことがわかりました。また、「理解できる」ものにしたことにより、古代日本人の文化や精神、信仰のあり方がわかるようになりました。

国学の四大人は、荷田春満、賀茂真淵、本居宣長、平田篤胤であり、学問としての国学に裏付けられた神道説を復古神道ということの紹介がありました。

荷田春満は、国学の学校設立を当時の幕府に上申しようとしたとともに、日本書記、古事記、万葉集、風土記、伊勢物語などの研究を進めた人物であることがわかりました。

賀茂真淵は、春満に入門し、徳川吉宗二男の田安宗武の「和学御用」に勤め、万葉集を研究し、「万葉考」を著した人物であるとともに、「国意考」儒教・仏教を徹底的に批判し、日本固有の道を見出し、おのづから(自然)の道、イコール、神道の存在を主張した人物であることがわかりました。

本居宣長は、京都で医者修行中に国学を学び始め、後に真淵に入門し、古事記伝を著した人物であることは有名であるが、これにより多くの人々が初めて古事記の内容を十分に理解できるようになったことから、神代を理解し、神道を理解しようとした復古神道の確立者であることがわかりました。

平田篤胤は、本居宣長没後の門人を自称し、宣長の説をわかりやすく江戸の庶民に講釈した人物であり、霊能真柱を著し、死後の靈魂の行方を論じるとともに、そ

の中で、幽冥界の实在（大国主命を幽冥主宰神と位置付ける）を主張するとともに、西方浄土のように遠く離れた世界ではなく、「草葉の陰」から先祖が見守っているという素朴な民族的信仰を理論化した人物であることがわかりました。

次に国学の社会地域への眼差しについて学びました。

本居宣長は、古い習慣は地方に残存しているとし、「古え」を理解するために地方の言語、習慣への注目を促していき、柳田國男の「方言周圏論」（古語は都から遠く離れれば離れるほど方言として残存しているとする説）に繋がり、古語から古代文化の解明へという方法論が国学の基本になったことがわかりました。

近世における地誌編纂を通して、地域の信仰や風習などの民俗（地域文化）に対するまなざしが生じ、地域文化のコーディネータとしての役割を国学者が果たしていたことに注目されたことがわかりました。

19世紀に入ると地域における経済の発展と同時に貧富の差、地域差が拡大し、18世紀までの国学需容層（上層の武士や都市の裕福な商人が中心）であったものから、国学を学ぶ地域の指導者層に増大していき、天保期（1830年代）前後に、幕藩政治の矛盾が露わとなり、社会問題が顕在化し、地域の課題を解決しようとする「草莽の国学者」たちが現れてきたことがわかりました。

「草莽の国学者」には、小西篤好、宮負定雄がおり、小西篤好は「農業余話」を刊行し、苗に雌雄ありと主張する内容のもので好評を博し、後年「農聖」と称されたものであることがわかりました。宮負定雄は草木撰種録を著し、撰種方法を図解し、植物には必ず雄と雌があるという考えに基づく、産霊（ムスヒ）信仰と農業生産が結びつくものであるが、そもそもは本居宣長が古事記の中の産霊（ムスヒ）信仰を重視したことが根拠となっており、ムスヒは万物精製の根本・男女の和合こそ生々発展の根源であると理解することができることがわかりました。

最後に、地域の文化・伝統の「再発見」による地域振興の可能性について学びました。現在の日本では、文化庁により日本遺産を管理、保存を行っている（文化財保護法による）が現存する100あまりの日本遺産を保存するだけでなく、活用していく発想の転換がされ、観光などへの波及効果も期待されていることがわかりました。

また、都道府県ごとに「文化財保存活用大綱」が作成されており、大綱に基づき、各市町村は「文化財保存活用地域計画」を策定（マスタープラン兼アクションプラン）することができ、令和7年7月時点で210自治体が策定していることがわかりました。

計画策定のプロセスに、地位にかつて存在した文化・伝統を再発見・再確認し、それを現在の地域振興へと活用する方策の可能性を見出すために現代的な人文知の再構成（総合化）が令和の国学の必要性として求められていることがわかりました。

■樋口氏の講義では、同氏が2014年に統廃合により廃校となった旧猪位金（いいかね）小学校を利活用して「音楽を中心とするコンテンツ産業の創出・集積」を目指して作った会社の事業で始めた施設「いいかね Palette」での取り組み事例について学びました。

最初に、「廃校」について紹介がありました。毎年全国で300校～600校程度の廃校が増えており、そのうちの一部が活用されているものの、活用がうまくいかず再度廃校に戻るケースも少なくないことがわかりました。

廃校になる原因としては「過疎化（人がいない）」「都市化（生活者減少）」「高齢化（子どもがいない）」の3つがあり、利活用としてうまくいくケースは「都市化」であり、「高齢化」でも人がいるので、利活用はまだ可能性はあるが、「過疎化」のケースではまず、最初に人を集めないと利活用はうまくいかないと考えているとの紹介がありました。

同校が存在する田川市は炭鉱の町であったが、石炭産業が撤退したのち、10万人の人口が半減し完全失業率も高い町であるとの紹介がありました。

「廃校」を活用した施設運営を自由に行える権利をもらう契約をし、民間が好きに儲けてもよい、完全独立採算制（ハイリスク・ハイリターン）、施設の改修、解体などが自由に行える要件で、事業を始めたとのことでした。

いいかね Palette を始めるにあたり、耐震問題、浄化槽問題、消防法や消防施設問題、宿泊事業における特定防火対象物問題、衛生保健所など、多くの問題が発生したとの紹介がありました。

2017年4月にオープンして（国の地方創生交付金やクラウドファンディング等で約1,000万円程度調達して開始して）から、音楽スタジオ、パソコンルーム、コワーキングスペース、シェアオフィスなどいろいろ作ってやってみました。宿泊もはじめました。（10床）

様々なメディアに取り上げられ、当時の最大メンバーは13人おり、WEBサービスもやっていたことから東京支社も作り規模拡大していったが、10か月後に資金不足に陥り、倒産の危機に見舞われたとのことでした。（融資、投資含め、7,000万円が消えたとのこと）

やめるか、続けるか再検討した結果、全員を一度解雇した後、自分1人だけで継続しつづけよう（給料なし）と決心し、社員に話をしたところ、ボランティア志願者（青柳氏）が手を上げ、同氏の広告制作ノウハウを活用し、東京で、広告の仕事を取り、制作会社に手配する事業で食いつなぐことができたとのことでした。

少し持ち直したところで、近隣の宿泊事業をやっている事業者に任せて再開してもらうとともに、一度解雇した元社員を宿泊事業者の社員として入社させ、3人で事業を継続できるようになったとのことでした。

イベント事業者を誘致したり、音楽イベントを誘致することで、事業を少しずつ進められるようになり、軌道に乗ってきたところにコロナ禍となったことで、また、事業が傾き、どん底に叩き落された雰囲気になったところで、再度事業を見直した結果、やらなければならないこと（宿泊をやっていたから続けないといけない）ではなく、やりたいこと（自分がやって楽しいこと）をやろうとなり、収益化、事業化をしたいということではなく、やった結果、収益化、事業化につながっただけで、自分の趣味がそのまま事業になったようなもので、自分が空き部屋に置いてあった酒のボトルを使ってバーを開いたところ、スタッフの1人が料理を作りたいと言出し、そのままレストランに移行され、未だに収益が出ている事業になっているとの紹介もありました。

個展を開きたいと言ったスタッフがお金がないとなったときに、クラウドファンディングが得意なスタッフに資金集めをすべてまかせ、自分は個展の開催のみに注力させたことで、これもまた当たり、地域の芸術家と連携し、さまざまな個展が開催できるようになった事例の紹介もありました。

元々あった、ベッドや、空き教室などを区画で区切り、スタッフや市民に貸し出すことで家賃収入が安定的に入ってくるようになった事例や、北陸のドローンスクール会社からの場所活用のオファーが入った事例や、ドライブインシアターの事業をやったりした事例の紹介もありました。

一つのまとめとして、誰かの「やりたい」が新たなコンテンツの火種になることがわかった。との話がありました。地域創生となると、やりたいことをやらないとうまくいかないのではないかと感じているとの紹介がありました。

ある時にいいかね Palette の駐車場（運動場）、やばくないとの指摘を受け、再確認すると、ひざ下くらいまでの深さの大きな穴が空いている状況で、意外とこの問題は無視できないぞとなり、駐車場を舗装するためにクラウドファンディングで500万円を目標に始めたとのことでした。

結果として2000万円が集まった。これは、今までの活動が評価されたのと、事前準備をしっかりと行ったからではないかと考察しているとのことでした。

今回の事例が誰でも同じやり方でできるものではないが、この話の内容を聞いた方達がどのように感じ、どのように活用していくのかは受け取り手次第のことであるが、単なる他者の成功事例として見るだけでなく、自らの事例に昇華させていくことが重要であることを理解しました。

■所感

久元氏の講義は、人口減少が顕著化している現在において、自治体が持続可能な都市をどのように考えていくかを考えることができ、とても有意義なものでありました。

三宅氏、宮島氏の講義は、小説を元にした町おこし（交流人口増加）の可能性に、ついて学べるかと期待したが、内容がファンミーティングであったことと、著者の宮島氏が小説の舞台となる滋賀県大津市（地元）を盛り上げることは全く意識していないし、小説が売れ、対象自治体から町おこしに活用したいとのオファーについても全くノータッチであり、小説を活用した町おこしにとっても繋がるような内容ではなかったことが残念でした。

松本氏の講義は、”国学”をテーマに地域創生につながる取り組みについては、ほとんど言及がなく、国学の基本と、歴史に関する講義であった。この内容から日本遺産を持たない自治体はどのような取り組みをしていくべきかは全く想像が付き、あまり有意義なものではありませんでした。

樋口氏の講義は、”廃校の活用”をテーマに民間企業が地域創生につながる取り組みを行った事例の紹介でした。個々の取り組み内容については、聞いていて楽しい内容が豊富にありましたが、この事例を持ち帰り参考にすることはとてもハードルが高く、同様の取り組みが行える民間事業者が現れることを期待する以外に活用方法が見い出せないと感じました。

今回の講義は、他市町や、筆者、学者先生、民間事業者の事例であったが、活用したりすることが難しい内容であり、市の独自政策としてどのように適用していくか熟慮が必要であると思われる。今回の講義内容を一つの参考事例とし、江南市としてどのような取り組みを行い、どのような効果をもたらしていけるのか、しっかりと悩み、考え、提案し、取り組んでいきたいと考えます。